

# 優秀賞

## 『昔話の深層： ユング心理学とグリム童話』

河合隼雄著（和泉特設コーナー 講談社+アルファ文庫；A122-2）

情報コミュニケーション学部 4年 高柳衣梨

タイトルだけ見れば難しそうな専門書に思えるが、この本を読む前にあらかじめ心理学を勉強しておく必要はない。単純で素朴だが、人間の心の奥深くをとらえている昔話。著者の河合隼雄氏は心理療法家としての豊富な経験から、無理なく昔話の深層に隠された心理学的な意味を説明してくれる。

章ごと1つのテーマを設定し、例えば「ヘンゼルとグレーテル」の章では“母親からの心理的自立”を主題とし、見事な切り口から説明している。ありがたいことに、巻末に章タイトルに付く話が矢川澄子氏の丁寧な訳で全て収録してある。傍らにグリム童話集を準備しておかなくても、この一冊で論じられた箇所を参照しながら読むことができるので、非常に便利である。「ヘンゼルとグレーテル」、「いばら姫」といったおなじみの話だけではなく、日本ではあまり知られていない「トルーデさん」なども扱い、心理学的視点から分析しつつ内容が紹介されており、もっと他のグリム童話を読みたいという気持ちになる。

「第七章 トリックスターのはたらき」では「忠臣ヨハネス」について主人公である王の心理的成長過程を分析するとともに、タイトルのヨハネスをトリックスターとしてその性質、役割を解説している。ここで日本の昔話「義経の忠臣弁慶」などを例として取り上げている点がおもしろい。昔話の奥底には全人類に共通したものがあるのではないかという興味深い仮説をうち立て、グリム童話の登場人物たちがいっそう身近に感じられるのだ。

ただひとつ納得できないことがある。それは筆者がユング派の心理学者であるため、いたしかたないことなのかもしれないが、性的な問題についてはほとんど触れられていないことだ。性的な暗示は昔話の大きな魅力のひとつなので、本書の数少ない欠点といえるかもしれない。

本書のねらいは、グリム童話を主人公たちが意識と無意識の交流を経験しながら、自分の個性をはっきり自覚してゆく物語と捉えることにある。人生とは、自分の個性を自覚し、葛藤、努力、躓きを繰り返しながら洗練させてゆくことにあるというのだ。人生を前向きに、肯定的にとらえる著者の考えには非常に勇気を与えられる。

昔話に秘められた「深層」を知ること、集団主義に偏りがちな現代に生きる私たちは、昔話の登場人物の自己実現の過程から自分自身のより良い生き方を見出すことができる。そこから新たな視点を学び取り、男と女、家庭での人間関係、さらには自分自身のことをもっと知るきっかけにもなるだろう。自らの心の奥底への探求心を高めてくれる一冊である。